紅月

倉岡玉由

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
紅月

【Ｎコード】
Ｎ２３２９Ｃ

【作者名】
倉岡玉由

【あらすじ】
普通の中学生、宮本大輔は普通の少年。そんな彼が、ある夜不思議な女の子と出会う。彼と彼女の不思議な関係がはじまる…

夜とのデス・マーチ

紅く染められた雲、傾きかけた太陽、時針は午後六時を指していた。
六月のこの時間帯にしては少し遅い日の入りかもしれない。
ちょうど仕事帰りのサラリーマンやＯＬがそろそろ街にあふれ出し、
子供達が家路に着く頃だ。

一人の少年が、すこし足を速め夕暮れの大通りを歩いていた。
少年の名前は宮本大輔、板橋区内の公立中学校に通うごく普通の中学二年生だ。
身長は高いほう、体重は普通、顔は妻夫木聡とオダギリジョーを足して変な感じにした感じって言われたことがある。
運動は、球技以外ある程度できる。なぜか昔から球技は恐ろしいほど出来なかった。
小学校のときは、クラスで一番足が速かったのにもかかわらずサッカーで補欠をやったほどだ。
勉強はいまいちパッとしない・・・。そのせいで四月から進学塾に通わされている。
先日の中間テストの成績が悪かったので、今まで五時までだった塾に六時まで通うはめになってしまった。
今日も塾の帰り途中。

本当にどこにでもいる普通の中学生、大輔はそんな少年だ。
今日も六時の夕焼けチャイムがなったので、さっと荷物を片付け塾を後にし、帰路を急いだ。
理由は簡単だ。夜が怖いから・・・。
誰でもあるだろう。子供の頃なぜか怖かった、トイレやお風呂、鏡。

押入れの隙間から感じるなぞの視線。
そんなものは大抵夜にやってくるものだ。
だから大輔は怖かった。いや夜が怖いんじゃない、夜に巣くう者達が怖いんだ。
この大通りから一歩路地へと足を踏み入れたときに始まる夜とのデス・マーチ。
塾から家まで徒歩で二十分以上はかかる。しかし走れば、大輔の足なら十分そこそこで着く距離だ。
大輔は急いだ。いや急がなければならなかった。
人で賑わいだした大通りを人ごみを掻き分けながら走り、住宅街へ入る。
いよいよデス・マーチのスタート地点、この大通りと住宅街をわける電灯を曲がる。
この街は、大きな工業の発展などは無く、住宅や小規模の店舗がほとんどの小さな街だ。
だから大通りを一歩小道に入れば、そこに広がるのは住宅ばかりだ。

同じような形の家々を横目に走る。
途中、自販機の前に学生がたまっていた。夜の闇に光るその自販機の怪しい光に一瞬恐怖を覚えたが、走り続けた。
きっと止まったら終わりだ。こんなことを二ヶ月以上も続けている。

しばらく走るとそこに大輔の家が見えた。
大手住宅メーカーが作った形がほとんど同じ家が三軒並び、真ん中の家が大輔の家。
『ただいま』
この声が毎日繰り返される、夜とのデス・マーチへの勝利宣言。
大輔は噴きだした汗を半そでTシャツの袖で拭って、胸を撫で下ろした。
『お帰り、今日はどうだった』

『うんまぁまぁ』
『そう、今日はハンバーグだよ、手洗っておいで』
どこにでもある普通の親子の会話。現代ではめずらしいのかもしれないが・・・。
大輔の母はエプロン姿でキッチンから顔を出していた。
母の名前は歩美。三十五歳、大学在学中に今の夫と知り合い、交際一年で結婚。
二十一歳のときに大輔を産んだ。痩せ型で年齢より若く見える。

大輔は、手を洗い、リビングに入る。
テーブルにはすでに父親の姿があった。
父の名前は進也。歩美と同じで三十五歳。大学在学中に歩美に一目ぼれして猛アタックの末、交際をスタートしその後結婚した。
現在は中流企業のサラリーマンとして働き、非常にまじめな性格からか最近課長に昇進した。
まじめな性格からか、朝食と夕食はなるべく家族と一緒にとるようにしている。
席に着くと進也が言った。
『おかえり』
『うん』
会話はそこで終わったが、この年頃の親子の会話なんて、この程度なのだろう。
一家は同じテーブルで同じご飯を食べている。
皮肉なことにこれだけでも現代ではめずらしいのかもしれない。
それに大輔は両親と仲が悪いわけではない。
口数こそ少ないが、お互いにちゃんと理解しているし、冗談だって言うし、第一にお互いに信頼しあっている。
だから大輔は両親に暴力を振るうなんて事は絶対に無かった。
この親子の間には、言葉なんかなくてもちゃんとしたキズナがある。

『今日はどんな勉強したんだ』
進也が尋ねた。
『う～ん、一次関数をやったけど難しくてよくわからなかった』
『そんなんで大丈夫か』
『うん、まぁなんとかついていけてるし』
『そうか、まぁがんばれよ』
どこの家でもそうだが、なぜか親というもの勉強について厳しい。
ここだけは大輔もキライだった。
なにかあればすぐ勉強しろ、勉強しろ。
そして『がんばれ』
なにががんばれなのだ。
親は気軽にそう言うが、子供の立場から見ればそれは理解しがたいエールなのだ。
こんなにがんばっているのにこれ以上どうがんばれっていうんだ。
いったいなんのがんばれなのだ。
大輔はちょっとムッとしたのを抑えて呟いた。
『うん』
その後は会話もなく、バラエティー番組のかん高いお笑い芸人の声と箸の音が食卓に響く。
大輔はこの空気から抜け出そうと、早々に食事を切り上げ部屋へ向かうため階段を上がった。
大輔の部屋は二階にあるのだ。
部屋に入ると溜まっていた疲れが出てきたのか、ベッドに倒れこんだ。
このまま眠ってしまいたいとことだが、そうもいかない。
明日も学校があるので風呂に入らなければならない。
仕方なく起き上がりタンスを開け、下着とパジャマを取り出した。
そして、そのまま力無くドアを開け階段を下りる。
一階にある風呂場へと入り、服を脱ぐ。中に入りサーっとシャワー

をあびると湯船に入った。
この至福の瞬間を大輔はこの上ないほど味わった。
そしてゆっくりと目を閉じる。わかっている、わかってはいるけれど大輔はそのまま意識が薄れていく・・・。
そして湯船のなかで深い眠りについてしまった。
深い、深い表層意識の最深部へと足を踏み入れてしまえば底から先はもう夢の世界・・・。
空を飛ぶことだって、芸能人と結婚することだってできる世界。
それでも現実は過ぎていく。

この家もそんないつもの普通の家族の夜を迎えていた――。

夜とのデス・マーチ（後書き）

初めて書いた作品です。
本人目線ではなく、あえて第三者の目線という形に挑戦した事がとても印象に残ってます。
ただ、納得はいっていない作品でもありますね。

最初の出会　～Ｆｉｒｓｔ　Ｃｏｎｔｅｃｔ～

あれから何分経つのだろうか。
大輔が目覚めた時、風呂場の防水時計はすでに９時前を指していた。
どうやらあれから１時間以上も寝てしまったらしい。
まだ眠気の覚めないのを抑え浴槽から出ると、サッと体を洗う。
シャンプーとリンスを済ませ、風呂場から出る。

ふと喉が渇いたので、飲み物を取りに行こうとリビングに向かった。
リビングの扉から中を覗くと、両親が一緒にテレビを見ていた。
こういう時は子供ながらにもそっとしておきたいもので、飲み物を諦め部屋に戻ることにした。
そのまま階段を上がり、自分の部屋に入る。
このまま寝てしまおうかと思ったが、まだ早いとも考えベッドでマンガを読むことにする。
本棚から適当に一冊取りベッドに飛び乗る。
手に取ったマンガは最近人気の出てきた自転車のマンガ。
大輔はこのマンガが好きだった。
理由は簡単、主人公が自分と少し似ているから。
なんのとりえも無く普通に生きてきた主人公が、自転車や仲間と出会い少しずつ変わっていく姿を見ると、自分もこうなりたいと願ってしまう。
そんなマンガだった。

しばらく読み進めていうちにあることに気がついた。
肌寒い・・・。ふと部屋を見渡すと、ベランダの窓が開いていた。
風呂上りの体にとってはこの風は厄介なものなので窓を閉めようと

立ち上がり、窓に近寄る。
窓を閉めようとしたその時がきっとそうだったのだろう。
以外にも最初の出会いは早くもやってきた。

ベランダの向こう側、隣の家のベランダに人がいた。
大輔はその姿に見とれてしまった。
風に揺られる白いワンピースと、長い髪。
そしてその人が自分と同じくらいの年頃で、あまりも綺麗だったから。
初めてだった。こんなにも美しい人を見たのは。
いつもはテレビや雑誌の向こう側で笑顔を振りまく美しい人はたくさん見ているが、それとは何か違う。
静かで繊細で、押したら壊れてしまいそうな美しさ。
スラリとした体に、長い髪、そして何よりもほかと違ったのがその目だった。
見つめると引き込まれそうな、どこまでも続く黒の世界。

大輔が見とれていると、彼女のほうから声をかけてきた。
『こんばんは』
綺麗な声だった。まるで透き通った水の流れのようななかにもしっかりと力がある声。
『こっ、こんばんは』
大輔はビックリしてその言葉をオウム返しにしか出来なかった。
その上、声が裏返ってしまった。
『よかったら、すこし話さない』
くすくす笑いながら彼女はそういった。
『えっ、あ、うん』
大輔は心の中で叫んだ。ここで断ったら一生後悔する。
しかし同時に疑問に思っていた。

―隣の家に娘さんなんていたか―
確かに大輔は今まで隣の朝日奈さんは大輔の両親ぐらいの夫婦が二人ですんでいると思っていたし、実際それ以外の人物を見たことはなかった。
すこし不思議に思いながらも、近くで話そうとベランダの先端に歩む。
大輔の家と、朝日奈家は工事業者のミスですごく近く、ベランダ間が1メートルほどしかない。
おそらくジャンプすれば渡れるほどの距離なのだ。
近づくにつれ彼女の顔がハッキリ見えてきた。
綺麗な顔立ちだがすこし細すぎる気がする、あごのラインがどことなくキュッとしすぎている。
ベランダの縁に手をかけると彼女が口を開いた。
『宮本大輔君だよね』
『うん、そっちは』
『朝日奈沙耶香。１４歳だから大輔君と同じかな』
『じゃぁ同い年か、朝日奈さんの娘さん』
『うん』
『初めて会うよね。どこ中』
『学校は・・・行ってないんだ』
『えっなんで』
『ごめん・・・今は言えない』
その言葉ですこし重苦しい言葉が流れ始めるが、彼女が明るく口を開いた。
『よかったらこれからも話に来てくれない。夜九時ごろにここに居るからさ』
『うん、べつにいけど』
『ホント、ありがとう』
『うん』
下心がなかったといったらこれはきっと嘘なんだろう。

大輔は生まれてはじめて女子と毎日会う約束をした。
それから二人は一時間ほど話しをした。
大輔のこと、沙耶香のこと、最近のテレビのこと。
色々話したけれどほとんどが大輔への質問攻めだった。
旗から見ればつまらない会話は無いだろうが、沙耶香はずっと笑顔を絶やさなかった。
大輔もなぜかずっと笑顔だった。
『明日もここで待ってるから、お願い来てね』
『うん、来るよ』
二人はしっかりと明日の約束をし、話を終えた。
話が終わった後、大輔はベッドに入ってその余韻に浸っていた。
こんな楽しい思いをしたのは、大輔自身初めてだった。

大輔は知らない、これから起こることも、何もかも。
しかし運命の歯車は回り始めてしまった。
二人が出会ってしまったから。

大輔は明日のことを考えながらそのまま深い眠りについた。

二人の最初の出会いは、紅い月が輝いていた――。

昼の世界

世界が昼と夜に分けられるのだとしたら大輔は昼の世界の住人だ。
いや大輔だけではなく、大抵の人はそうなのだろう。
ほとんどの人は、朝目覚めると顔を洗い、食事をする。
食事が済めば歯を磨き、服を着替えそれぞれ違った職場や学校へ向かう。
すべてが太陽の光によって照らし出される光の世界。
人は生きるために働き、未来のために学ぶ。
しかしそんな平凡な生活を送れるのも本当はすごく幸せなことなのだろう。
現代人の多くはそんなことも忘れ、毎日を送っている。
大輔もきっとそんな人間の一人だろう。

そして今日も朝がやってきた。
大輔は目こそ覚めたものの、まだ布団に包まっていた。
どうやら早く起きてしまったようだ。
大輔は布団の中でなぜか不思議な気分だった。
まるでふわふわと宙に浮かぶかのように体が軽く、軽やかな感じ。
きっと風船に意思があったらこんな気分なんだろう。
おそらく昨日のことが頭にのこっているからだろう。
昨日眠るときもそうだったが、妙に体が軽い。
きっと新たな出会いに自然と体が喜びを感じているのだろう。
それはきっとこれから起こることを大輔の脳も心も体も予想なんてしていなかったからだ。
でもこんないい気分の日は、平日でも布団の中でゆっくりしていたいものだ。
だけど、そうもいかない。
だって大輔は昼の世界の住人だから・・・。

学校に行かなければならない。
そういえば大輔は生まれてから今まで学校をさぼったことなんてない。
『学校なんてだるい、めんどくさい、つまんない』
と、多くの若者は語るが、本当に学校を嫌いに思っているやつなんてほんの一握りだろう。
ここでひとつ問おう。
だったらなぜ学校を休まない。
それは結局口先だけってことなんだろう。
それがカッコいいわけでもない、すごいわけでもない。
ただそういう錯覚を起こしているだけなんだ。
大輔もそんななかの一人なんだろう
だから今の今まで学校をさぼったことがないのだ。
大輔は今日もいつも通りそんなことを思いながら、体をベッドから起こす。
ふと気になった。
沙耶香はどうしているのだろう。
昨日沙耶香は学校には行っていないと話していた。
だとしたらまだ寝ているだろう。
そう思いながらも大輔はサッと窓の向こう側を見たがカーテンは閉まっていた。
はぁ・・・
大輔は小さくため息を吐いた。

一階から朝とは思えないほど元気な歩美の声がする。
『大輔、起きてるの』
『うん、今行く』
大輔はそう言うと、学校指定の学生服に着替え下に降りていった。
リビングに入るとまたもや歩美の元気な声がこだました。

『おはよう、大輔』
『うん、おはよう』
大輔も朝としては精一杯の声を出したが、聞こえているかは定かではない。
もう気付いている人もいるだろうが大輔はよく『うん』をよく使う。
それはきっと『うん』が一番楽だから。
どんな問いかけに対しても、それなりで尚且つあいまに出来る。
その日の朝食は、トーストにスクランブルエッグ、ハムとサラダ。
それに大輔の大好きな牛乳だ。
さっと朝食を済ませると、大輔はテレビを見ながら歯を磨いていた。
いつもはなにかしら芸能、政治、社会でなにかしら話題があるものだが、その日は特に何も無かったようで、一週間前の殺人事件の話を昨日とほとんど同じ内容でやっていた。
テレビなんて所詮そんなものだろう。
話題が無ければただの光るおもちゃの箱。
今日もどうでもいい、犯人の過去、友人関係、性格を友人、知人、親戚とかがモザイク付きで出てきて、べらべらとあること無いことを話し始める。
歯を磨き終えた大輔はこれ以上テレビを見てもたいしておもしろくなさそうなので、部屋に戻った。
またベランダの方を見るが、相変わらずカーテンは閉まっていた。
時間は８時すこし前を指していたので、そろそろ学校へ行くことにした。
以前も述べたが、大輔は板橋区内の公立中学校へ通っている。
幸い、学校までは片道１５分程度なので、この程度の時間に家を出れば、十分に登校時刻に間に合う。

大輔は登校時、誰かと一緒ということはなかった。
それは入学当初から、ずっと変わることなくそうだった。
きっと、それが、一番気楽で、尚且つ数少ない一人の時間をつくるチャンスだからだ。
決して、友達がいないわけではない。
むしろ、友達は多いくらいだ。

大輔は学校でも、まったく授業が頭に入ってこなかった。
なぜなら沙耶香のことを考えていたからである。
ほとんどの授業中彼女のことを考えていた。
休み時間中、友達と話すことはあったが、彼女とのことは一切話さなかった。
いや、話すべきではないと大輔も思ったのだろう。

そして、今日も大輔は昼の世界の生活を送っていた。
朝起きたら、適当に準備をして、学校に行く。
学校が終われば、帰宅し、塾があれば塾に。
約束があれば、約束の場所へと向かう。

そして、夕陽が傾き始めるころ、昼の世界が終わる。
月が輝き始めたら、そこはもう夜の世界だ。
たくさんの星の輝きはなくとも、月だけはしっかりと輝いてくれる。

しかし、月は所詮、太陽の光を受けて輝いているだけだ。

でも余分なものまで照らす太陽とは違い、月は、必要なものだけ照らしてくれる。
だからこそ、夜の世界には月が必要なのだ。

こうして、今日も昼の世界は廻り続ける。
そして、この先どんなことがあろうとも、大輔と沙耶香が昼の世界を一緒に生きていくことはないだろう。

大輔が、夕刻、家に帰るころ、昼の世界は終わりを告げていた。
そして今日も、紅き月が輝くのだろう。

夜の世界

大輔が昼の世界の住人なら沙耶香は夜の世界の住人だ。
それは、彼女が望んでそうなったわけではない。
まだ大輔も知らぬ、小さいが同時にすごく大きい嘘だ。
彼女もわかっているだろう。そんな嘘はすぐにばれることが…。
それでも今は言いたくない、いや言えない。
やっと見つけた小さなつながりを壊したくない。
このままでいい。このままがいい。

彼女が夜の世界の住人になったのは約半年ほど前の出来事だった。
半年前までは彼女は両親の教育方針もあってか、私立の中学校に通っていた。
小学校も私立、幼稚園も私立だった。
それ故、今まで大輔との面識がなかったのだ。
いや正確にいえばなかったわけではない。
彼女が夜の住人になってからというもの、カーテン越しに見える大輔の姿を毎晩見ていた。
好きとかそういう感情はまだない。
でも、誰でもいいから話ができる人がほしかった。
時間がない。少しでも自分のことを知ってくれる人が必要だった。

ただでさえ人との出会いの少ないこの夜の世界。
きっと自らの望んで住人にでもならない限り、好きになることはできないだろう。
でも彼女はこの世界が嫌いではない。
それは、大輔と出会えたことが一番の理由だろう。
この世界に住んでいなかったら、もしかしたら出会えなかったかもしれない。

お互いに存在は知っていてもああして話すことはできなかったろう。

今日も、夜だけは本当の自分でいられる。
彼女は昼のうちは寝ている。
正確にいえば寝ていなければならない体なのである。

沙耶香は重い病に冒されていた。
それも、もう長くない。

本来ならば、こんなところにいてはならない。
病院のベッドの上で、点滴や治療を受け少しでも長く生きようとしなければならないのだ。
彼女はそれを望まなかった。
最後の時間を病院のベッドの上で、副作用の強い薬に苦しみながら死ぬなんていやだったのだ。
それで、半年前に退院した。
両親は娘の決断を認めてくれた。
しかし、学校に通うことは医師も両親も許してはくれなかった。
学校に通わなくなってから一度たりとも友達が来てくれたことはなかった。
初めて、友達ってこんなものなのかと思った。

退院の条件は、家の中での絶対安静だった。
それから彼女の夜の世界の生活が始まったのだ。
両親が寝始める九時頃から彼女の本当の生活が始まるのだった。
体重も五十キロあったのが、四十キロまで落ちた。
先日の医師の話では、もって後二、三ヵ月。
生きて来年を迎えることはまずできないといわれた。

大輔にもいつまでも黙っているわけにはいかないだろう。
最初の出会いから1週間ほどたったが、いまだに言い出せずにいる。
ただ怖いのだ。
本当のことを打ち明けたら、大輔は二度と会いにきてくれないのではないか。
もう、はなすことはできないのではないか。
その恐れが、彼女の口を噤んだ。
一週間の間彼女は、必死に笑顔を装った。
このほほえましい関係を壊したくない。
そんなことを考えながら、ベッドの上で昼の世界が終わるのを待った。

両親はなるべく、彼女と話さないようにしている。
会話があるのは、三度の食事のときや用件があったときぐらいだ。
長く話していると、どうしても涙がこぼれてきてしまう。
あと三、四ヶ月で死ぬ娘の顔を見ながら、ちゃんと話す自身なんて無かったのだ。
それで彼女は、話をする相手がほしかったのだ。

そろそろ、太陽が傾き始めた。
昼の世界ももう終わりだ。
もうすぐ、夜の世界がやってくる。
時針は六時を回ったところだった――。

すべてを知った夜

あれから、何日たっただろうか？
大輔はそんなことすら忘れるほど充実した日々を送っていた。
もしあんなことになるのなら、出会った日から毎日、日々を数えていただろう。
彼女の病のことなど知らない大輔は七月に入ったことに気づいた。
あれから一ヶ月ほどたったことになる。
後二十日も経てば夏休みが始まる。

今日もいつもと変わらない夜がはじまった。
そう、いつもと変わらない夜が・・・。
『こんばんは』
9時を少し回ったころに沙耶香が顔を出した。
つられるように大輔も声を出した。
『ちーす』

今日も始まるのだ。
夜中に近すぎるベランダを隔てて始まるおかしな関係が。
ベランダに寄りかかり大輔が話をふった。
『今日ね』
『何。』
『七月に入ったことに気づいたんだ』
『そういえばもう七月だね』
それは、沙耶香の命があと一ヶ月ほどと言われるようなものだった。

そして、ついに気づいた。
『そういえばすこし痩せた』
『えっ、そうかな』

少しじゃない、この一ヶ月でさらに体重が3キロ落ちた。
『うん、絶対やせたって』
『う～ん、ちょっとダイエットしてるかも』
女性にとってうれしいはずの言葉が、彼女には重くのしかかる。
最近は、食事もろくに喉を通らなくなってきた。
そろそろ潮時かもしれない。手遅れになるまれに、彼女は決意を固めた。
『大事な話があるの』
『えっ』
大輔はドキドキしていた。
大事な話というのは彼にとって告白を意味していたからだ。
『ちゃんと聞いてくれる』
『う、うん』
もう、止まらない。彼女の言葉の先に何がまっているかなんて誰も知らない。
『あのね』
『ちょっとまって。そこから先は俺に言わせて』
『えっ』
『俺・・・沙耶香、沙耶香が好きだ』
『えっ』
言葉が見つからない。自らの言いたかったことと彼が発した言葉が違いすぎたからだ。
そして、その言葉があまりにも取り返しの付かないことだったから。

言葉が出ない。でもお互いにわかったことがある。
沙耶香の瞳から涙がこぼれている。
それだけでお互いの気持ちを理解するには十分だった。

しばらくの沈黙の後、沙耶香が口を開いた。

『ありがとう。嬉しい。まさか大輔君の口からそんな言葉が聞けるなんて思ってなかった。
私も大輔君のこと大好きだよ。
でも・・・その前に私の話を聞いてほしいの。』
気持ちの整理をつけて、できるだけの言葉を発した。
『うん、聞くよ。』
これが、運命の歯車の最終点検だったのかもしれない。
ここで止められなければ、この歯車は最後まで回ってしまうのだろう。
『私はもうすぐ死ぬの。』
『えっ』
『詳しくは教えてくれなかったけど、私の体は重い病に冒されていてもう長くはないの』
『えっ』
大輔の口からそれ以上の言葉は出なかった。
『それでも、私を好きでいてくれる』
しばらく大輔は言葉を発することができなかった。
『ごめん。いまいち状況が理解できないや。
本当のことを言っているの』
『うん、私が冗談でこんなことを言うと思う』
彼女がそんなことを冗談で言うわけないとわかってる。でも信じられない。
彼女がもうすぐ死ぬ。そんな馬鹿なことあってたまるか。
『ごめん。今日はもう寝るよ。』
そう言って逃げるように、部屋へ入った。
その夜が、すべてを知った夜だった――。
『明日も待ってるから』
沙耶香のその言葉だけが、この夜に響いた。

大華火

すべてを知ったあの夜から、大輔はベランダに行くことをやめた。
やめたというより、恐れているのかもしれない。
でも気づいている、沙耶香があの言葉のとおり毎日待っていることを。
このままではいけない。
自分の気持ちがわからなくなってしまっている。
今の大輔にはしばらく一人で考える時間が必要のようだ。
でもこのままではいけないことはわかっている。

あの夜から三日たったその日、大輔は手紙を書いた。
今の気持ちを正直につづった手紙だ。
『正直、僕はわからない。
君の言ったことが本当だとしたら、僕はどうすればいいのか。
今の自分の気持ちすらわからなくなってきた。
だから、少しだけ時間がほしい。僕がおびえず君を好きといえるようになる時間がほしい。』
書いているうちに涙で便せんが濡れた。
その涙だけで大輔の気持ちは十分に伝わるだろう。
そして、短くも大切なその手紙を大輔はそっと、沙耶香の家のベランダに置いた。

その夜も大輔はベランダに行かなかった。と、いうより行けなかった。
でも、彼の心のなかで決意は固まり始めている。

七月十七日。この日は近くの神社の夏祭がある日だ。
そして、同時に大華火大会の開かれる日なのだ。

大輔も毎年、友人たちとその日を楽しみに待っていた。
でも今年は違う。大輔は、友人の誘いを全て断った。今年は祭りを楽しむような気分じゃなかった。
そして、決めた。この日が決断の日だ。

やってきた。七月十七日という運命の日がついにやってきてしまった。
彼は、学校から帰ると準備をした。もちろん心の。
夜八時、彼は神社に行った。決して遊びにいくのではない。
生きて来年を迎えられるかわからない彼女のためにたこ焼やカキ氷、焼きそばなどを買いに行くためだ。
一通り欲しいものを買ったころには、八時四十分を回っていた。
今から帰れば、九時に始まる華火大会に間に合うことができる。
彼は急ぎ足で、家へと帰ると二階へかけあがった。
時刻は九時四分前。間に合った。
沙耶香はまだ、ベランダに姿を見せていなかった。
大輔は、ベランダに出る前に深呼吸をして覚悟を決めた。
大きく叫んだ。
『沙耶香』
近所の人がビックリするくらいの声だったろうが、幸い近所の人は華火を見に行って留守だろう。
それでなくとも町内会の集まりで留守になっている。

彼女が出てきた。今からはじまるそれを人は奇跡と呼ぶのだろう。
しかし、これは奇跡じゃない。すこし前から、回り始めていた歯車で、運命なのだ。
彼女は言葉を放った。
『大輔君』
その言葉は大輔の名前を呼んだだけだった。でもそれだけではない、もっと大事な何かが詰まっていた。

大輔も言葉を返した。
『沙耶香』
もう、大輔に迷いはなかった。
沙耶香に近寄る。近寄るといってもそれはベランダの隔てての奇妙な関係に変わりはない。
『伝えたいことがあるんだ。』
小さな声だったが、同時に大きな勇気のある声だった。
『うん』
彼女も小さな返事を返した。
『僕は、臆病だ。そして無力だ。
でも、誰にも負けないものがあることに少し前に気づいたんだ。』
『うん』
『それは君を想う心。最初は下心がなかったといったら嘘になる。
でも今は違う。
もしよかったら聴いて欲しい。』
『うん』
彼女の瞳はすでに潤み始めていた。
大輔の口からどちらの方向性の言葉が出ようともう彼女に決心はできていた。
そして、大輔が口を開いた。
『沙耶香・・・沙耶香が好きだ。』
それがすべてなのだ。
それ以上でも以下でもなく、その言葉がすべてなのだ。
大輔が沙耶香を好きな気持ちは何も変わらない。それが例え、後1ヶ月で死ぬ人であろうとも、後1週間で死ぬ人であろうとも、たった今死ぬ人であろうとも。
自然と二人の瞳から涙が零れていた。

二人の運命の歯車はついに止まることなく回り続け、そしてやがて崩れていく。

もしも、この先奇跡が起こるのならそれが最善の方向性かもしれない。
でも、その奇跡が起こることはまずないだろう。
なぜならそれが、運命なのだから――――。
夜空には、大きな華火が輝いていた――――。

最初で最後のキス　～Ｆｉｒｓｔ　ａｎｄ　Ｌａｓｔ　Ｋｉｓｓ～

華火が、これからの彼らの祝福になったらどれだけ幸せか。
９時から始まった華火は、夜空を照らしながら儚く散っていく。
大輔の決意と勇気によってもたらされたその言葉によって、二人の想いは重なった。

でも、大輔はわからない。
これから自分がどうすればいいのか。彼女になにをしてあげられるのか。
自分は何をすべきなのか。
でも、もうそんなこと悩んでも仕方がないことに気づいた。
いくら悩んでも終わりはやってくるのだから。
だから、彼は今の幸せな時間を楽しむことにした。
『これ一緒に食べようと思って買ってきたんだ』
そう言って、祭りで買ってきたたこ焼きや、焼きそばなどを差し出した。
『ありがとう。せっかくだから冷めないうちに食べよう』
にっこり笑ってそう言ってくれたのが何よりも救いになった。
彼らは、この時間を楽しんだ。
華火を見ながら、出来るだけ明るい話をした。

しばらくして沙耶香が口を開いた。
『あのね』
『ん』
『聞いてほしいの』
『うん』
『私が死ぬのは分かるよね。だから、その前に伝えたいことがあるの。

私は大輔君が好き。今、一番大事なのはあなた。』
『うん、僕もだ』
『うん、だけどそれだけじゃなくてもっと大事ななにかを伝えなければならない気がするの。
私は、大丈夫。自分の死だもの。自分でちゃんと整理をつけられる。
でも、残された大輔君のことが心配なの。』
悲痛な叫びだったが、大輔も痛いほどその気持ちがわかった。
『分かってる。僕も分かってる。
君が死ぬなんて本当は信じられない。いや、信じたくないのかもしれない。
でも、それが本当なら僕は泣かないよ。
でも、君を忘れない。それだけで十分だと僕は思ってる。』
大輔は本当に思っている気持ちを伝えた。
精一杯の可能な限りの言葉であり、もしかしたら最善の言葉だったのかもしれない。
そして、これからの二人にとって大事な言葉だったのかもしれない。

『うん、大輔君なら大丈夫。』

それから、しばらく沈黙が続いた。
口を開いたのは、大輔だった。
『これからは、ちゃんと毎日来るよ。君がそこにいる限り。』
それから沙耶香も口を開いた。
『うん、ありがとう』
花火も終盤に差し掛かり始め、どんどん空を彩っていく。
今日が晴れだったことが何よりも幸いだった。

それから、たわいのない話をした。
好きな花の話。夢の話。

お互いの事をちゃんと知らない、彼ら。
でも、本当はちゃんと知っている。お互いがどんな存在なのか。
とにかく、話をした。
やっぱり、少し悲しい気持ちと雰囲気は収まらなかった。

でも、華火が終わるころ彼らに小さな奇跡が舞い降りた。
大きな枝垂れ柳の三尺玉が上がり、続いて大小様々な大きさの華火が上がった。
きっかけは単純。
お互いにそうしたかったからそうしただけ。
大輔と沙耶香はキスをした。
それは、ほんの数十秒だったかもしれないし、数分だったかもしれないし、もしかしたらほんの数秒だったかもしれない。
そんなことは彼らにとってどうでもよいことなのだ。
彼らは、形が欲しかったのかもしれない。
それが、たんにこういう形だっただけの話だ。

ベランダからお互いに体を伸ばした変なキス。
それが彼らにとって最初で最後のキスになった――――。

紅月

華火大会の夜。最初で最後のキスをした夜から彼らは毎日会った。
会って話した。それだけで十分なくらい、充実した日々だった。
だって、これすらもいつかは出来なくなるのだから。

最初で最後のキスをした夜から五十九日後。
９月１５日。
すでに季節は秋に成り代わったが、相変わらずベランダでの奇妙な関係は続いていた。
その間も、彼女の状態は決して良いものではなかった。
大輔の前でも堪えきれず咳き込んだりした。
それでも、彼女は毎日大輔に会いにきた。
彼女の言うとおり、彼女にはそれしかないからだ。

その日の前日も、彼女は大輔と話をした。
・・・『ねぇ、知ってる。』
彼女が、話を始めた。
『何の話。』
『月がなんで紅いのか知ってる。』
本で呼んだことがあった。
月が紅いのは、実は目の錯覚で本当は黄色く見えるはずだが、この国で見ると太陽の光が反射して紅くみえるそうだ。
『うん、知ってるよ』
『そう、でもね私最近本当の理由を見つけたんだ。』
『本当の・・・理由。』
『うん、それはね思い出を忘れないため。
黄色の光は、余計なものまで照らしすぎちゃうでしょ。
でも紅い月なら、思い出したいことだけ思い出させてくれる気がす

るの。
だから・・・。』
大輔がそれ以上は喋らせなかった。
彼女が、自分が死んだ後の世界について話すのが許せなかった。
今、生きている沙耶香を見ているのは自分なのに、もう沙耶香のいない世界の話をするなんてずるすぎるのだ。

確かに彼女はその日生きていた。
そして、その話を大輔が遮ったところでその日の話は終わった。
彼女からしてみれば最期のお別れがしたかったのかもしれないと後々思う。
でも、大輔はお別れなんて許さなかった。

その次の日、大輔はいつもどおり学校へ行った。
そう、何も変わらないのだ。
今日の夜も、いつもの場所で彼女が待っている。
家に戻ったのは、午後5時をすこし回ったころだった。

母親が、喪服に着替えて色々と準備をしていた。
嫌な予感が頭をよぎり、母親に問いただした。
『何してるの。』
『お隣の朝日奈さんの娘さんが亡くなられたそうよ。
私はお通夜に参列するから、晩御飯は一人で食べてね。』
大輔はその言葉を受け止められなかった。
沙耶香が死んだ。
大輔の頭の中ではその言葉だけが、グルグルと回っていた。
『僕も・・・行くよ』
『えっ、別に構わないけど』
それ以上問いたださないのが、大輔の親だった。

夜7時、沙耶香のお通夜に参列した。
でも、お焼香の列には並べなかった。
彼女の顔すら見えなかった。
その日が金曜日でよかった。
次の日、葬儀にも参列した。
でもやはり、お焼香の列には並べなかった。
席の一番後ろの方で、俯いていることしか出来なかった。

最期のお別れとでも人は呼ぶのだろう。
でも、大輔はそれをすることが出来なかった。

結局そのまま夜を迎えてしまう。
思い出すように、自分の部屋へと入りベランダに向かう。

そういえば、最期に話した夜も紅い・・・紅い満月が輝いていた――。

その後の世界

ベランダに出た、大輔の息も心も乱れていた。
そして、なによりもその瞬間、涙をこらえるのに必死だった。

一歩ずつ、踏みしめるようにベランダの縁へと歩む。
沙耶香の家のベランダに、数枚の便箋と花が生けてあった。
その花は、以前話したことがある大輔の好きな花だった。
鈴蘭・・・花言葉は幸運が戻ってくる。
でも、彼の元に幸運はもどってはこない。
そして、便箋を手に取った。
そこには、一言『ありがとう』と書いてあった。

彼女は、大輔に言いたかった言葉をたった一言に表した。
涙が零れた。
もし、幸運が戻ってくるのなら、沙耶香が戻ってくるのなら大輔は人だって殺せるだろう。
でも、彼女は帰ってこない。
それが、すべてでそれ以上でも以下でもないのだ。
ただひとつ、彼女は帰ってこない。
今、泣けるだけ泣こうと思った。
涙は人間の感情を表現するなかで一番便利だと、この時知ったのかもしれない。
そして、この時決意した。
彼女を忘れない。
もう泣かないし、これから恋だってするだろうし、大切な人が何人も出来る。
でも、彼女を忘れない。
あの月に誓って。

その後の世界は何も変わらなかった。
月曜日にはちゃんと学校にも行った。
そう、沙耶香の死は世界になんの影響力もないのだ。
これが、死ぬってことなのかもしれない。
人の命にはそんな力は備わっていないのかもしれない。

彼女の死を通して、変わったものが一つある。
大輔だ。
何も変わっていないようで、すごく変わった。
誰も気づかないほどだけれど、確かにほんの少し変わったのだ。
彼が、この先大人になってもそれは続くだろう。
その変化は、大人になっても彼に残るのだ。

その後の世界・・・それは大輔が彼女の思うための世界。

その夜も、夜空には紅い月が輝いていた――紅月――。

その後の世界（後書き）

お疲れ様でした。
初作品で全く納得いってはいないんですが、これからも様々な作品を作っていきたいと思います。
現在、もう一つ連載中ですので是非そちらも。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2329c/

紅月

2010年10月25日02時00分発行